講義受講ノートの電子化による学習履歴の記録と活用

皆川 雅章*1
Email: minagawa@sgu.ac.jp

*1: 札幌学院大学社会情報学部社会情報学科

◎Key Words　講義ノート作成指導，初年次教育，学習履歴，ノートの電子化

１．　はじめに

社会科学系学科の１年次学生が情報社会について学ぶ専門科目の中で，講義受講ノート作成の指導を行っている。高校段階までの「板書を書き写す」ノートから，多様な形で行われる大学の講義の内容を理解・整理し，配布資料などとともに「後から参照し活用する」ことの出来るノートに移行するための訓練を行っている。ノート作成に際しての基本的な指示は「詳細なメモ取り」，「振り返りのためのまとめ」を行うことであり，講義後にノートを回収し，これらの指示の観点から評価する。講義の最初に前回の講義内容に関する小テストを実施する。解答時にノート参照可とすることで，ノート作成に必然性を持たせている。このような取り組みを通じて作成されたノートには，受講者の学習履歴が残されており，本来の目的に加えて，修学指導にも利用できると考えている。ここでは2014年度前期に実施した講義の受講ノートを PDF 化し教員間の情報共有を促進する試みについて報告する。

２．ノート作成指導

今回の指導の目的は，１年次前期科目が担っている役割として想定される次の点である。

①基本的な学習姿勢を身につける 。
②大学での学びの方法を身につける 。
③学ぶ楽しさ（達成感）を感じさせる 。

上記の①を達成するために，以下のように講義運営上の指導方針を設定している。この学習姿勢は，②および③を達成するときの前提ともなるもので，自ら知識を吸収しようとする姿勢と併せて，講義に臨む姿勢も含めて考えている。

①遅刻，欠席をさせない
②講義に関係のない話（私語）をさせない
③授業に参加・集中させる
④忘れ物は自己責任であることを認識させる

ノート作成指導を履修者全員に対して行うために，ノート提出を成績評価に組み込むこととした。次のように，ノートの評価に，小テストと定期試験の評価が加わる。

①小テスト（30%）
②ノート提出（30%）
③定期試験（40%）

このような評価に加え，毎回の講義終了後にノートを提出させ，出欠管理を行った。科目ごとのノート作成を意識づけるために，綴じられたノートを使用することとし，ルーズリーフの使用は認めていない。方針徹底のために，ノートを忘れた場合には，代用の紙片での提出は認めずに，欠席扱いとしている。これが前述の「忘れ物は自己責任であることを認識させる」ための手段である。

ノートの取り方については，次のような指導を行った。まず，将来に向けての習慣づけのために，ノートには必ず日付を記入させた。

また，市販の関連図書[(1)(2)]を参考にして，現実的に取り組むことができるような目標を設定し，次のように伝えた。

①講義中の説明（板書，スライド，口頭説明）をもらさずノートに取る努力をする。
②ノートの左右のページを使い分け，左はメモ，右はまとめに使用する。
③ノートを読んで講義内容を再現できるようにする。

単にノートを提出させるだけでは，ノート作成指導につながらない。何らかの形で評価指標を設定し，評価結果を学生にフィードバックすることが必要である。初回の講義で，次のような評価方法の周知を行っている。

①講義中の説明で出た語句や説明の流れなど，あとからノートを読み返して，その日の講義内容を再現できるようにメモを取っている。あとから確認や調べものができるようになっている。
（３点:GoodJob スタンプ）
②講義内容のメモ，連絡事項など，忘れてはならないことが書いてある。
（２点:Good スタンプ）
③講義内容のメモ，連絡事項など，最低限のことが書かれていない。
（１点:OK スタンプ）
④日付の書き忘れがある。　（－１点）

提出されたノートに対して評価を上記の３種類のスタンプで示し，必要に応じてコメント等を記入している。この評価に加え，履修者の意欲を持続させるために，ボーナスポイントを設定した。

ノートは講義後，数日中に添削して，小テストの採点結果とともに，教務課窓口を経由して返却している。これは，授業開始時に返却を行うと，教室内にざわつきが生じて講義開始に向けた集中力が損なわれるためである。

３．　講義の方式

ノート作成指導は，それだけが独立して存在するのではなく，講義の実施方法全体の中で機能すると考えて著者が『20＋50＋20 方式』と名付けた方式を採用し

た。90 分の講義を，大きく 3 つに分け，最初と最後の 20 分を小テストとまとめを行い，中心となる 50 分は，講義説明をノートに取らせる。

最初の 20 分に，前回の講義内容の復習を主たる目的として，小テストを実施している。履修者は教科書とノートを自由に参照して問題を解いて良い。前述の指導方針に従い，５分を超えた遅刻者には小テストは渡さない。小テストは採点してノートとともに返却し，解答を Web 上に掲載している。

講義の最後の 20 分に時間を取って，受講ノートにメモしたことのまとめを行わせる。毎回，講義終了後にノートを提出させ，ノートの記述内容をチェックし，適宜，ノートの取り方についてのアドバイスを書いている。ノート提出をもって出席としているので学生は毎回ノートを持参することが必要になる。

「定期テスト」は一切の披見を許さず，自力で解くことを要求している。テスト前には「講義内容のまとめ」をノートに書かせ，これも評価の対象としている。このことを通じて，講義全体の振り返りと，ノートに基づいた定期テスト対策を行わせている。定期テストは小テストから出題するので，毎回の小テストに積極的に取り組んでいる履修者にとっては難しいことではないことを講義時に繰り返し伝えている。

４．　実施結果

以下では，学生が作成したノートについて，前述の指導内容と関連づけながら説明する。

最初に，ノートを左右のページで使い分けている例を示す。図１が左，図２が右のページである。左ページでは主にキーワードのみをメモし，右のページではキーワードをもとにした文章化が行われている。

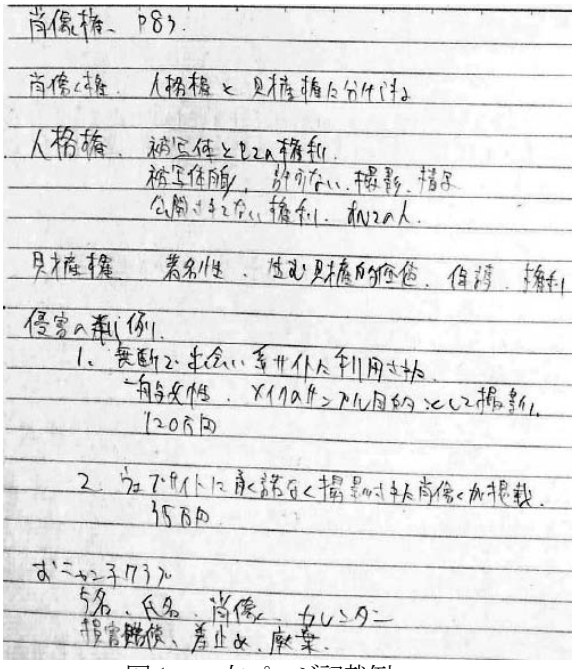


図１　　左ページ記載例

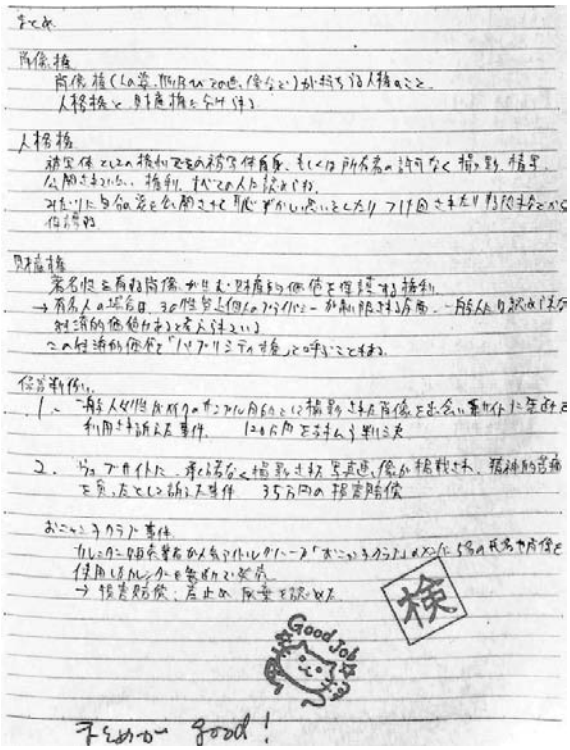


図２　右ページ記載例

図３は，キーワードとともに，教科書上の参照ページを記している。講義中，教科書とノートの両方を使って，自分用の情報整理をするように伝えているので，それを実践している例である。

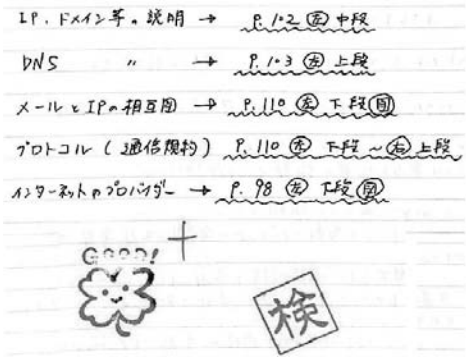


図３　教科書の参照箇所を記載している例

５．　ノート評価と履修成績の関係

前述の配点に基づく評価結果の分布は次の通りである。欠席した場合，ノート提出の評価がなくなるので，出席回数が評価に影響する。

目安としては，15 回すべて出席し，毎回「Good」の評価を得た履修者の場合，評価が 30 点になる。履修者数は 85 名，定期試験受験者数は 75 名，単位取得者数は 63 名である。以下のグラフは定期試験受験者 75 名を対象として作成している。

図４にノート評価合計点数の分布を示す。現段階の評価方法では評価者の主観の影響を受けることは排除できていないので，「傾向」としての判断であるが，30 点前後の得点者が最も多くなっており，前述の評価方法「②講義内容のメモ，連絡事項など，忘れてはならないことが書いてある。」履修者が多かったと見ている。

図５にノート評価合計点数と，小テスト評価の関係を示す。小テスト解答時は，ノートと教科書を参照可としているので，ノート評価の高さが反映されている。小テスト評価は，15 回分の評価点の合計点である。前述のように，遅刻者は小テストを受ける権利がなく，その分の評価点がない。ノート評価合計点数の最小値は 11 点，最大値は 42 点，小テスト合計点数の最小値は 158 点，最大値は 588 点となっており，毎回の講義での取り組みの差が積み重なり，大きな点数差となっている。

図６にノートの評価と定期試験評価の関係を示す。ノートの評価は高いが定期試験の点数がとれない学生，ノートの評価は低いが定期試験の成績が高い学生が複数名存在する。このような傾向を読み取り，修学指導に使えるのではないかと考えている。例えば，前者については，試験準備方法の指導を行う。

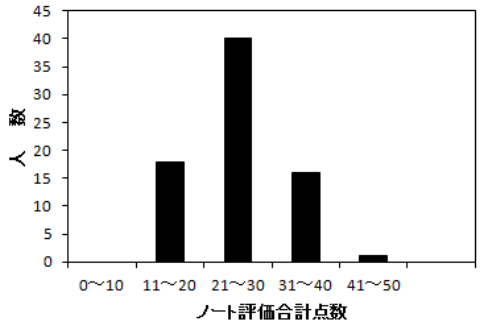


図４　ノート評価合計点数の分布

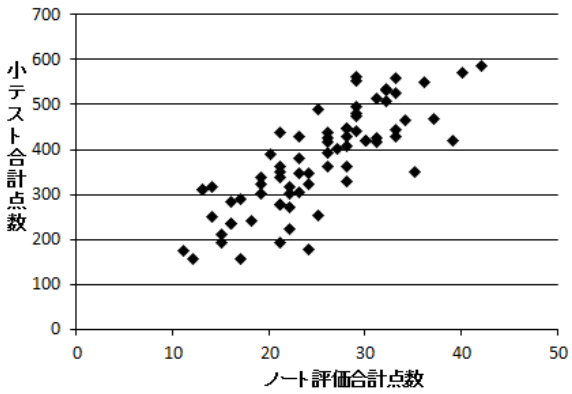


図５ノート評価と小テストの成績との関係

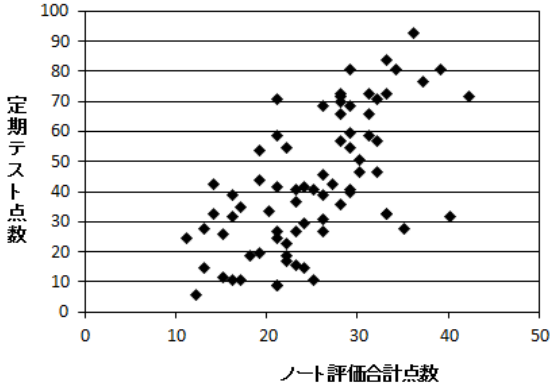


図６ノート評価と定期テスト成績との関係

最後に，ノート記載ページ総数の分布を図７に示す。ページごとの記述に精粗の差はあるが，ページ数の最小値は 14，最大値は 94 である。著者は他の科目においてもノート提出を義務づけているが，ノート作成指導・評価を行わない場合には，明らかに記述量が少なく，このようなページ数には達しない。

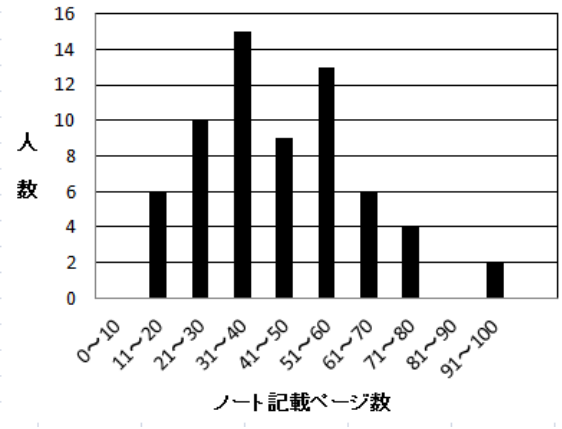


図７ノート記載ページ数の分布

６．　学習履歴としての活用

以上の取組みと検証結果に基づき，講義受講ノートの学習履歴としての活用には以下のような方法があると考えている。

①活用１：

ノートの取り方から，高校までの学習習慣を知る材料とする。ノート紙面の使い方，メモの取り方，整理のしかた，教員の指示に対する対応のしかたなど，高校段階までに習慣化していることを知る材料とする。

②活用２：

ノート評価と小テスト，定期テストの点数を併せて見ることによって講義の取り組み姿勢，講義の理解度を知ることができる。特に，学期の途中でこのような傾向を知ることが出来れば，修学指導に利用することが可能である。

③活用３：

上記の活用２を想定し，ノートをPDF化して学生の学習履歴を残すことによって，他の科目での指導の参考資料として活用できる。さらに，4年間の継続的な指導を通じ，長期的には社会で役立つノート作成スキルを身につけさせるために，この学習履歴情報を教員間で共有し，横断的・継続的な指導に結び付ける。

④活用４：

PDF 化されたノートを，翌年度の履修者に対して具体的なノート作成例として示すことができる。先輩学生の事例は，履修者にとって身近で現実的な目標となる。

今回，上記③と④の活用を行うために，電子化された情報を共有するためのシステムとして，本学の学生指導シート「はぐくみ」を利用することとした。本学では，近年の学生の質的変化に対応するため，次の三つのキーワードを掲げて学生支援態勢の拡充に取り組むことを目指し，このシステムを構築した。

①エンパワーメント（力能を高める）

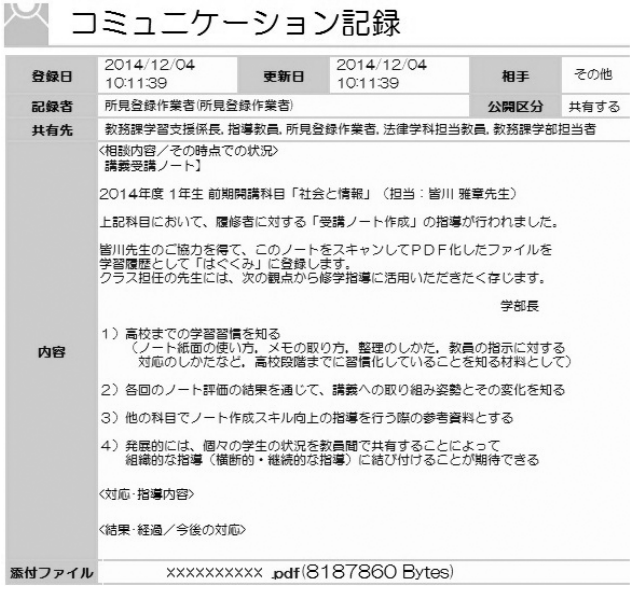
②サポート（学びを支援する）

③エンカレッジメント（勇気づける）

この「はぐくみ」が取り扱う情報は，履修状況，成績，求職，進路，課外活動といった基本データなど多岐にわたる。このシステムはこれまで，学生が抱える問題の把握，相談・指導の履歴を教職員が相互に書き込んで情報共有を図り，修学や学生生活の面での「問題解決支援」のためのツールとしての活用場面が多い。

筆者は，学生の学びの成果を共有し，目標達成へ向けた個別支援を展開するツールとしての活用を図るためのアプローチの１つとして，電子化された講義ノートを学習履歴として記録・活用することを考えている。

今回は，図８に示すように，「コミュニケーション記録」欄にノートの画像を pdf 化したものをファイルで添付し，2014 年 12 月から閲覧可能としている。この記録欄は，ゼミ等の担当教員，教務職員が閲覧，記載ができるようになっているので，相互にやりとりをしながら，他の修学状況に関する情報と併せて活用することが可能である。



コミュニケーション記録

登録日	2014/12/04 10:11:39	更新日	2014/12/04 10:11:39	相手	その他
記録者	所見登録作業者(所見登録作業者)			公開区分	共有する
共有先	教務課学習支援係長, 指導教員, 所見登録作業者, 法律学科担当教員, 教務課学部担当者				
内容	〈相談内容／その時点での状況〉 【講義受講ノート】 2014年度 1年生 前期開講科目「社会と情報」（担当：皆川 雅章先生） 上記科目において、履修者に対する「受講ノート作成」の指導が行われました。 皆川先生のご協力を得て、このノートをスキャンしてＰＤＦ化したファイルを学習履歴として「はぐくみ」に登録します。 クラス担任の先生には、次の観点から修学指導に活用いただきたく存じます。 学部長 １）高校までの学習習慣を知る （ノート紙面の使い方，メモの取り方，整理のしかた，教員の指示に対する対応のしかたなど，高校段階までに習慣化していることを知る材料として） ２）各回のノート評価の結果を通じて、講義への取り組み姿勢とその変化を知る ３）他の科目でノート作成スキル向上の指導を行う際の参考資料とする ４）発展的には、個々の学生の状況を教員間で共有することによって組織的な指導（横断的・継続的な指導）に結び付けることが期待できる 〈対応・指導内容〉 〈結果・経過／今後の対応〉				
添付ファイル	xxxxxxxxxx .pdf(8187860 Bytes)				

図８　「はくぐみ」による情報共有(2014 年 12 月)

７．　おわりに

１年次学生が情報社会について学ぶ専門科目の中で，高校段階までの「板書を書き写す」ノートから，多様な形で行われる大学の講義の内容を理解・整理し，配布資料などとともに「後から参照し活用する」ことの出来るノートに移行するための訓練を行った。ノート作成に際しての基本的な指示は「詳細なメモ取り」，「振り返りのためのまとめ」を行うことである。この取り組みを通じて作成されたノートには，受講者の学習履歴が残されており，本来の目的に加えて，修学指導にも利用できると考え，ここでは受講ノートを PDF 化し教員間の情報共有を促進する試みを行った。

現段階では，本アプローチで行っているようなノート作成指導を取り入れている講義数は限定されており，有効性を検証するには，今後もデータの蓄積を行っていく必要があると考えている。また，活用方法も含め，組織的な学生指導に向けた取組みについては今後の課題である。

継続的な取組みとして，2015 年度は，ルーブリックによる評価と小テストの pdf 化を進めている。このことによって，指導による変化や効果を，より具体的に知る手がかりになることを期待している。

参考文献

(1) 長尾佳代子，谷川裕稔，中園篤典：”大学生・短大生のための大学での学び方”，旺文社(2013)

(2) NHK「テストの花道」製作チーム，主婦と生活社ライフ・プラス編集部（編）：”勉強力がぐんとアップする合格ノート術”，主婦と生活社(2013)